

作業遂行から見た 認知症の作業療法

浅井 憲義



認知症この指とまれミーティング

平成 25 年 2 月 15 日 (金曜日)

1. 認知症の中核症状と周辺症状

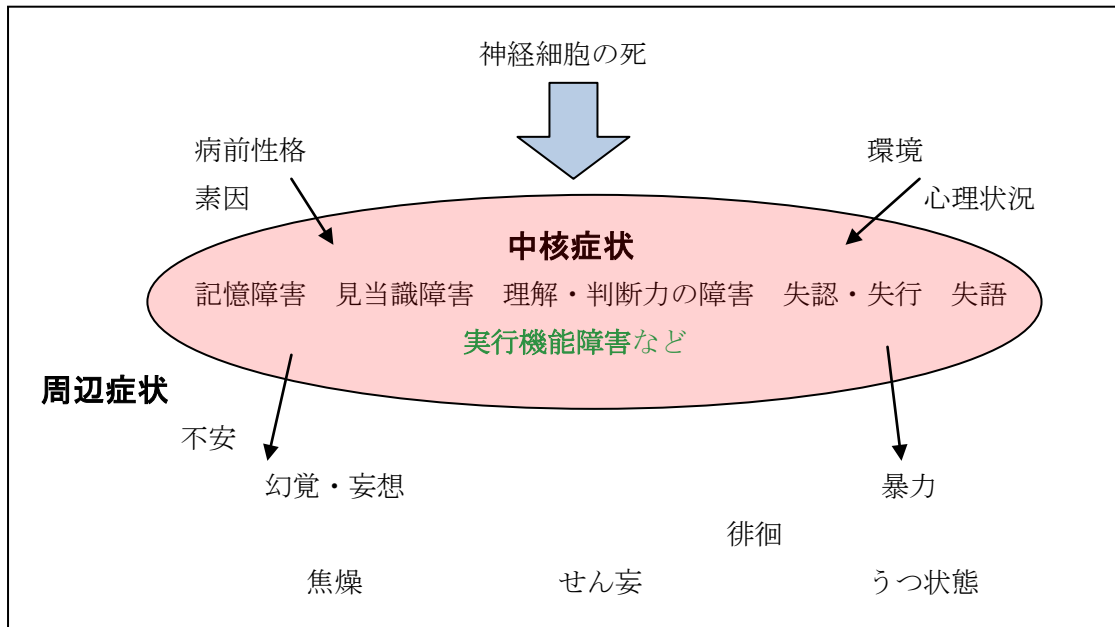


図 認知症の中核症状と周辺症状

1) 中核症状

(1) 実行機能障害：認知と行動を結びつけて社会的活動の遂行を可能にする。

行動の開始の意志決定（意志）、計画の立案、計画の実行、効果的に行動を行う（想定外の行動にも対応できる）。

- <病巣> ①前頭前野：日常生活動作
 ②前頭葉症状：脱抑制、社会的逸脱行動

(2) 行為の障害（失行）

- ①観念運動失行：手をあげる、肘を曲げる、ジャンケン
 運動器官に異常がないのに、目的に沿った動作をすることができない。
- ②観念失行：手をあげて敬礼の意味を示す。煙草を出し、口にくわえ、マッチで火をつけ、煙草につけるといった喫煙の行為が出来ない。
- ③着衣失行：身体運動は問題がないのに、洋服を着る順序が違い、洋服が着れない。
 目的の行為をする時に、手順を間違えて、目的を果たすことができない。

2) 周辺症状

(1) 行動障害：焦燥や不安などによる、衝動的な行動。不穏、暴言、徘徊。

他人の言っていることが理解できず不安になる。エピソード記憶は障害されても海馬、扁桃体が関与する情動は保たれているため、情動に関する事で、問題を起こす。

徘徊：日時、時間、地誌的な見当識障害で夜間に会社に行こうとする

道に迷う：地誌的空間認知

- <病巣> ①前頭葉症状：常道行動の1つで、周回が起こる。前頭側頭型認知症

2. 遂行機能

言語・行為・記憶など高次脳機能を制御し統合する「より高次の機能」問題解決・推論・計画立案・意志決定・行動評価をなどの能力をいい、先を見通して状況の変化に臨機応変に対応しながら柔軟に行動する

<病巣> 前頭前野の機能

3. 作業遂行モデル

(1) 作業遂行：目的や意味を持った活動をして、活動をしたことがその人の役割に繋がる。

- 作業 : 人の日々の営み
- 目的のある活動 : 生活をするうえで必要な活動
日常生活動作、趣味活動、家事活動、書字活動
- 意味のある活動 : 主婦にとっての家事活動、学生にとって学業、祖母の子守

(2) 作業遂行を組み立てる3つの要素

- ①作業遂行構成要素：心身機能、身体構造
運動機能、感覚統合機能、認知機能、心理的機能、社会的機能
- ②作業遂行領域 : 日々の活動
身辺処理活動 仕事活動、遊び/余暇活動、休息/睡眠
- ③作業的役割 : 社会に参加する
就労（会社員）、家庭（主婦・主夫、夫、妻、子供、学生、祖父、祖母）
学業（学生）、ボランティア、町内会長、年金生活者

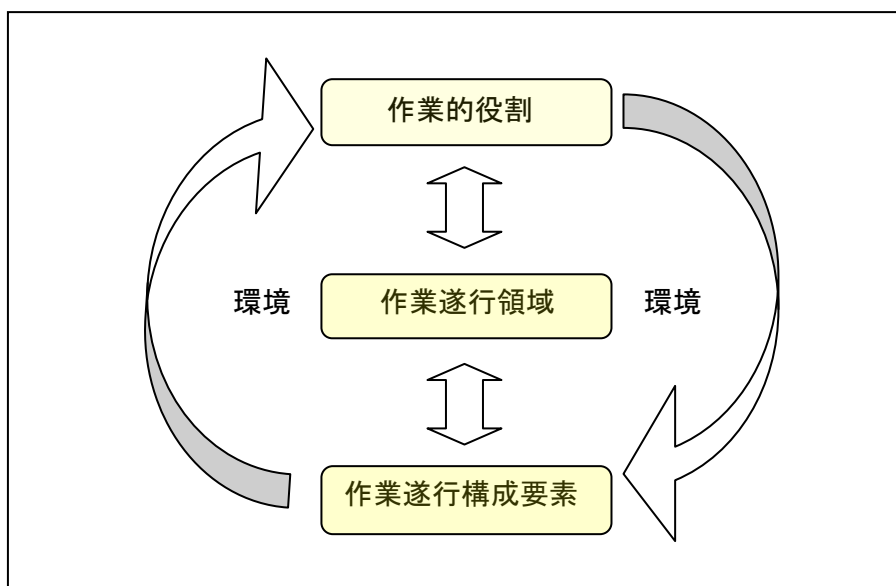


図 作業遂行モデル

4. 作業遂行モデルで見た認知症

1) 症例紹介

年齢：50 歳代の男性

職業：アパレルメーカー会社で洋服のデザイン

職場での様子：電話応対で要件を記憶し、メモが取れない（記銘力障害）。

会議内容を忘れ仕事での失敗を起こす（実行機能障害）。

アルツハイマー病と診断され、休職して妻の介護を得て、家庭で過ごす。

家庭での様子：仕事へ行けないこと、家族からは発言内容についての間違いを指摘され、不満が募り、家族に暴言を吐く。金銭管理ができず無駄遣いをして家族を困らせる（周辺症状）。

2) 作業療法プログラム

会社の通勤経路の途中に位置している、若年性認知症のデイサービスに公共交通機関を利用して週に3回一人で通う。

作業活動の課題：鉛筆画を洋服のデザイナーとして、デッサンの経験を基にすすめる。

課題遂行の様子：本人も興味を示し、子供のころに見慣れた風景を思い浮かべて、克明にバランスの取れた構図で絵を描くことができていた。完成作品は通所者や職員から「昔に出会ったことがある風景」と驚きと賞賛を得て、症例も描いた時代や当時の様子を説明することに楽しみを感じていた。絵画の過程では色鉛筆、画用紙などの道具が保管なされている場所を記憶するのが苦手で、色鉛筆の色の名前が適切に言えず、机に置かれている消しゴムを見失うことも多々あった。このような場面では、職員に尋ねたり、援助を得て絵画の課題を行っていた。

症状の変化：テレビを見て過ごす時間は多いが、週3回の施設利用で妻との物理的な適度の距離がとれ、家族からの問題行動を指摘する機会も減り、本人の家庭内での暴言は減った。しかし、デイサービスに通う道すがら売店によって食べ物を買ひ、満腹感のため妻の作った夕食を食べないこと、デイサービス中にお菓子を友人に買い与へ、無駄遣いをし、妻に小遣いの不足を訴えるなどの金銭管理はできていなかった。

3) 作業遂行モデルでの症例の整理

①**作業遂行構成要素**：認知症状の心身機能では、認知症状は長期記憶、特に絵画の技術、電車の利用方法などの手続き記憶は保たれている。しかし、使用道具の置き場所などを憶える短期記憶が強く障害されていた。金銭管理では友人へのお菓子の提供が多く、小遣いが足りないとの不満がある。

②**作業遂行領域**：日常生活活動、仕事、余暇などの活動・参加では、家庭での活動は自立し、生活関連活動は一人で電車を利用してデイサービスに通うことも可能であった。余暇は家庭でテレビを見て過ごすことが多いが、デイサービスの仲間と通所途中で談笑をよくしていた。コミュニケーションは愛想がよく、話のつじつまを合わせるためにデイサービス利用者や職員との関係は良好であった。

③作業的役割 : 会社や家庭における参加では仕事は休職中で、会社と妻で退職に向けての話し合いが行われている。家庭では家族とのかかわりが減り、高校生、中学生の子供や妻に対して父親や夫の役割が減った。しかし、デイサービスに通い始め、絵画への取り組む姿は、夫、父親の役割を家族に再認識させることができた。

4) 作業遂行モデルから見たデイサービスの効果

- ①役割獲得 : デイサービスに参加することが、会社勤めをしていた時の同じ時間的枠組みを保つことができる。絵を描くことはアパレルメーカーでデザインを担当していた業務と類似しており、他者からの賞賛は仕事で得た達成感にも似ている。
- ②作業遂行領域 : 通所に必要な身支度や交通機関の利用は ADL, IADL を維持、昔の情景を思い巡らし、絵画を行うことは余暇活動である。
- ③作業遂行構成要素 : 決められた日時、時間に参加して、絵画を行うことは認知症の中核症状や周辺症状の悪化を遅らせることにもなっている。
- ④環境調整 : 介護者にとっては、終日患者と一緒に生活することから生じるストレスを、日中はデイサービスで患者が過ごし、家族とのと好ましい距離を作り、介護負担を軽減する環境を提供することができていた。

<作業療法介入の留意点>

(a) 活動の改善、維持、低下の軽減

患者がもっている知識や技術を出来るだけ良い状態で維持し、課題を提供するときには個人の選択を大切にして、過去に興味を持ったものを選ぶ。

(b) 理解しやすい指示

課題遂行に必要な認知能力を維持し、低下を防ぐためには失敗をせずに課題が出来るように、わかりやすい指示を出す。指示の出し方は簡単で明瞭な言語表現で、必要に応じてジェスチャーなどを交えて行うのもよい。

(c) 環境調整と使いやすい道具

慣れた環境で、操作が簡単で単純な用具を使用すると課題がしやすくなる。住み慣れた家で、居心地よい場所で昔から使っている用具で、普段の仕事をするのが認知機能が低下して、課題の内容を理解できなくなった人にとっても居心地のよい環境といえる。

(d) 危険防止

認知症患者は心身の機能が低下したことへの自覚がなく、動作の手順も忘れ、転倒をおこす。さらに、一人で外出し、道に迷い、帰宅出来ない人も多い。監視するのではなく、患者と空間を共有しながら楽しい時を過ごせる場所で、危険を少なくする。

(e) 介護者の負担軽減

家族、介護職、近隣の人々など多くの人たちとのネットワークを保っておく必要がある。人との繋がりをとおして、情報を交換することが認知症患者と接している家族や介護者の負担を減らし、介護者の QOL 向上に繋がる。